今週の
倫理

2026.4.25～5.1

4月のテーマ　|　人の縁

1487号

企業の再建は
恩意識の自覚から

Ａ氏が会社を起業してから十五期が経過しました。今日まで無我夢中で家族や従業員のために売上重視で事業を継続してきましたが、コロナ禍の時期から仕事の受注が減少し続け、とうとう経営が立ち行かない状況に陥ってしまいました。

そんなある日、経営者団体のセミナーで講師の話を聞く機会があり、「過去にお世話になった恩師、特に経営者としての姿勢や仕事を教えてくださった方がいたからこそ、事業を継続できているのではないでしょうか」という言葉が強く印象に残りました。Ａ氏は、仕事の発注元や仕入れ業者、金融機関等から寄せられた心遣いを忘れてしまっていたことに気づきました。

起業してしばらくは、独立前の勤め先のＢ社との縁で仕事を頂きながら、自社の地盤を作り上げていきました。しかし、数カ月後に新規の取引が好条件でスタートしたため、損得勘定を優先してＢ社からの仕事を断り続け、感謝のかけらもない状況のまま関係が途切れてしまったのです。

Ｂ社の社長とは、同じ業界の集まり等で定期的にお会いする機会があったのですが、義理を欠いた状態が続いていました。Ａ氏は、心の中では〈このままの関係では良くない〉と思い続けていたのです。

不義理な行為は、信頼を失い、周囲の協力を得ることができなくなってしまいます。Ａ氏は、助けてくれた相手に恩を返さず、自社の利益だけを追求していたことを反省し、Ｂ社の社長へ感謝の言葉を伝えに十五年ぶりに訪問する決断をしたのでした。

Ｂ社へ向かう途中、会って話す機会がありながら、まともに挨拶もせずにいた自分の態度を振り返り、申し訳なさのあまり、気持ちが沈みました。

しかし、Ａ氏の会社の役員でもある妻に、「気は心、お世話になった社長のお好きな菓子折りを持って、仕事を下さいなどと言わず、快く独立させてくれたお礼のみを伝えにお会いしてくればいいのでは」と励まされたことを思い出し、気持ちを落ち着かせることができたのです。

それでも、車を運転している途中で何度も引き返しながらＢ社の会社の正門へたどりつくと、ほうきを持って本社の玄関を掃除している社長の姿が見えました。

Ａ氏は、〈門前払いされてしまうかな、挨拶程度で終わってしまうのかな〉と思ったのですが、社長は勤めていた頃と何も変わらず、笑顔で招き入れてくれたのです。

独立後の無礼な対応を丁寧にお詫びをしてから退席しようとすると、「仕事はあるのか？　実は、協力会社と一緒に仕事をしているが、納期が間に合わない状況で、良かったら仕事を発注したいのだが」と予想もしなかった言葉をいただいたのです。

Ａ氏は感謝の気持ちを素直に伝えに行った結果、会社の再建のきっかけを頂けたことを肝に銘じました。これからは、お世話になった方々の恩を忘れないことを企業理念に加え、全社員一丸となって会社を発展させていく決意を固めたのでした。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局